

<参加したプログラムの内容及び主旨>

私は約 2 ヶ月間、眼科部門において研修をさせていただきました。もともと専修医対象である本プログラムですが 12 年目である私にもチャンスをいただき大変感謝しています。参加するまでは VA がいったいどういう病院なのかわからずに不安もありましたが、現地コーディネーターの奥津さんが研修から日常生活にいたるまで大変よく面倒をみてくださったので心強かったです。眼科医のプログラム参加は初めてだったようで明確な研修スケジュールはありませんでした。よく言うと自由でした。したがって毎日自分から気になるドクターをつかまえ、外来につかせてくれるようお願いして診療の見学を行いました。VA での診療は主にレジデントが担っており、診断や治療に苦慮した際に上級医にコンサルトを行うという流れでした。アメリカのレジデントは当然診療技術は未熟な部分も多いですが、非常によく勉強しています。勉強会でも積極的に発言し活発なディスカッションが行われます。手術も見学させていただきましたが、執刀もやはりレジデントやフェローが行っていました。総じてまれな疾患や病状の進んだ患者さんはおらず専修医であっても少し物足りなさを感じると思います。私はその辺を割り切っていましたので 1 ヶ月が経った頃から UCLA や private clinic にも外来や手術見学に行く許可をいただきました。病院によってスタッフの動きも診療体制も異なるのでいい経験をさせていただきました。また VA のドクターの勧めで UCLA の研究会にも参加することができ非常に有意義な時間を過ごすことができました。

<留学で学んだことを国立病院機構が提供する医療の質改善のためにいかに活かすか>

私は医長という立場もあり、後進の教育に関してアメリカではどのようにシステム立てて行われているのか興味がありました。したがって VA ではレジデントの教育、診療システムに目を配っていました。まず、火曜日朝に行われるカンファレンスではレジデントが順番にテーマに沿った勉強内容を発表していました。ただ一つの論文を吟味する唱読会よりも多数の論文や教科書をまとめ、自分なりに整理した形で皆に示すのは大変勉強になっているようです。診療に関しては上級医はコンサルトされた時だけ傍で指示を出し、普段の診療はほぼレジデントに任せた状態でした。その是非に関してはここでは述べませんが、それもあってかレジデントは自ら考え、積極的に治療に取り組んでいました。一通りの診療技術があれば可能な範囲内で積極的に診療に当たらせ自信をつけてもらうのも非常に大切だと感じました。今後、国立病院機構の発達のために必要なものは若手医師の教育だと思います。医療の質は若手医師の教育次第で大きく変わるものと思います。